

第3回多賀城政庁復元整備検討会 議事録

1. 開会

○事務局（県観光戦略課）

定刻になったので、これより第3回多賀城政庁復元整備検討会を開催する。開会にあたり、宮城県教育庁副教育長の後藤より御挨拶申し上げる。

○宮城県教育庁副教育長 後藤 正樹

本日は御多忙の中、「第3回多賀城政庁復元整備検討会」に出席いただき感謝申し上げます。

昨年10月に発足した本検討会も、今回で最終回となる。委員各位にはこれまで多大な尽力をいただいたことに、あらためて厚く御礼申し上げます。

これまでを振り返ると、第1回では多賀城の現状や果たすべき役割について、第2回では具体的な復元プロセスや維持管理のあり方について、事務局の説明に対し専門的見地から貴重な御意見をいただいていた。本日はその議論を総括するとともに、引き続き検討が必要な事項の確認や他地域の先進事例の紹介を通じ、さらに議論を深めていただきたいと考える。

全3回での意見は今月中を目途に報告書として取りまとめ、県として内容を踏まえ、多賀城政庁復元整備に向けた方針を策定する予定である。本検討会は本日で一区切りとなるが、今後も宮城県と多賀城市、関係者が一体となり、多賀城政庁周辺エリアの魅力向上に向けた取り組みを力強く推進していく。本日も忌憚のない御意見をお願い申し上げます。

2. 議事（1）多賀城政庁復元整備について

○事務局（県観光戦略課）

議事に入る。議事の（1）多賀城政庁復元整備について事務局から説明する。

○事務局（県文化財課）

（1）多賀城政庁復元整備について説明する。これまで、第1回検討会では復元の意義や目的、第2回では目指す姿や今後のスケジュール案を示し、委員から多くの御意見をいただいていた。整備の進め方については、第2回で政庁南側から北側へ段階的に整備する案を提示したが、「多賀城の象徴である正殿を第1期として先行復元すべき」との御意見があった。一方で、景観上の見え方や安全面、工法上の課題を踏まえ総合的に判断すべきとの御指摘もあった。

これらを踏まえ、正殿から整備する方向で検討を行った。想定としては、第1期に正殿、第2期に西側建物群、第3期に東側建物群を整備する構想である。点線部分は工事ヤードを想定し、それ以外は公開範囲とする。公開範囲では工事中の現場公開など情報発信も検討する。正殿の先行整備の進め方について、改めて御意見を求めたい。

復元建物の基本的考え方としては、復元考察に基づく空間展示機能の付与と、内部空間を活用した情報展示機能の整備を掲げている。これを踏まえた活用の方向性は次のとおりである。

第一に、復元建物内部の展示公開として、建物の構造や意匠を体験できる解説や、古代儀式の再現などを行い、古代を体感する場とする。

第二に、整備過程そのものを魅力あるコンテンツと捉え、工事状況の発信や現場公開を実施する。

第三に、復元建物を五感で体感する教材と位置づけ、体験・学習機会を創出する。

さらに、多賀城全域および周辺における活用として、遺跡理解と周遊の拠点となる展示案内機能の充実、多様な活用アイデアの受容を図る。東北歴史博物館では最新技術を活用した体験型展示を備える「スマートミュージアム」の実現を検討し、史跡巡りのためのデジタルデバイス運用やモビリティサービス導入も視野に入れる。

推進体制については、史跡の保存と活用を持続的な管理運営につなげる視点が重要である。そのため、宮城県と多賀城市の行政内部の横断的連携に加え、民間や市民とのパートナーシップ構築が必要となる。多賀城および周辺地域の振興や観光との連動も見据え、地域主体で継続的に活動できる仕組みづくりや、官民多様な主体が参画するプラットフォーム構築を検討する。

今後、首里城の事例紹介も参考としながら、多賀城の一体的な管理運営のあり方を検討していく。

2. 議事（2）視察報告

○事務局（県観光戦略課）

（2）視察の報告について、以前の会議で優良事例として御紹介いただいた沖縄県の事例の視察を行ったので、報告する。

○事務局（県文化財課）

1月8日、観光戦略課と文化財課の担当で沖縄県の首里城跡および勝連城跡を視察した。首里城については、観光と地域の誇りを両立させる好例として委員から御紹介があり、現地を視察した。

首里城では平成 31 年の火災以降、「復興過程そのものを公開する」方針のもと、参加型復興を展開している。工事現場には仮設通路や工程パネルを設け、仮囲いの一部を透明化するなど、復元の進捗を来訪者が学べる工夫がなされていた。素屋根設置時には見学デッキも設けられ、工事中ならでの視点で見学できる仕組みが整えられていた。

復元建物のあり方も多様で、正殿のように完全復元を目指す建物がある一方、外観のみ復元し内部を休憩所や物販施設として活用する事例も見られた。例えば、有料区画手前の建物は士族の家系図を管理した役所を復元し、現在は「首里城茶屋」として休憩・案内機能を担っている。また、正殿脇の建物は外観復元とし、内部をミュージアムショップとして活用していた。史跡における便益施設の配置には慎重な検討が求められるが、多賀城における復元建物活用を考える上で参考となる事例である。

正殿復興費用は約 120 億円、そのうち約 62 億円が寄付金で賄われている点も注目される。イオンは「イオン 1%クラブ」による「首里城復興プロジェクト」で 5 年間に約 5 億円を寄付し、全国店舗での周知活動も展開している。資金確保と機運醸成を一体的に進めるモデルとして大いに参考となる。

管理運営面では、首里城公園は国営・県営エリアに分かれるが、国営部分の復元建物も沖縄県が管理許可を受けて主体となり、指定管理者が一体的に運営している。多賀城跡の管理体制を検討する上でも示唆に富む。

続いて勝連城跡の視察を行った。勝連城跡は阿麻和利の居城として知られる世界遺産構成資産で、石垣を中心とした保存整備が進められ、建物復元は行われていない。五つの曲輪を登る構造で、最上段からは 360 度の眺望が広がる。説明板に加え、現地解説により理解が深まったことから、遺跡では現地案内の重要性を再認識した。

三の曲輪広場は現代版組踊の舞台として活用され、電気自動車によるモビリティサービスも導入されている。隣接する歴史文化施設「あまわりパーク」では映像シアターや出土遺物展示、3D デジタル展示などを備え、学習機能を充実させている。

特に印象的だったのが、地元中高生が出演する現代版組踊「肝高の阿麻和利」である。子どもたちの居場所づくりと地域振興を目的に始まり、出演を通じて郷土理解と誇りを育む取り組みとして定着している。

今回の視察を通じ、復元過程の公開、資金確保と機運醸成の両立、官民連携による管理運営、子どもたちの主体的参画など、多賀城の今後を考える上で多くの示唆を得た。歴史文化を地域の誇りとして次世代へ継承するための仕組みづくりの重要性を改めて確認した。

2. 議事（3）ワークショップについて

○事務局（県観光戦略課）

議事の（3）ワークショップについて説明する。

○事務局（県文化財課）

ワークショップは第2回検討会で提案を受けたものであり、「地域のステークホルダーとの対話の場を設け、市民向けシンポジウムやワークショップを早期に実施し、市民の自分事化を促進すべき」との御意見をいただいた。

多賀城政庁の復元整備を進めるうえでは、地元住民が多賀城を誇りに思い、主体的に関わることが不可欠である。そのため、ワークショップの開催を検討する。県民・市民の参画機会を創出し、継続的な対話の場として位置づけることで、「自分たちがともに築く」という機運を高め、シビックプライドの醸成につなげる狙いがある。

1月25日には市川地区勉強会に参加し、「地域として政庁復元に対して大きな期待や希望を感じている」、「地域を守りながら文化財と共存していくことが重要な目標である」との御意見が寄せられた。また、他地域事例を学ぶ機会を求める声もあった。来年度以降、内容や手法を検討しながらワークショップを開催していく考えである。

さらに2月15日には、「特別史跡多賀城跡周辺まちづくり協議会」が設立予定であり、地域住民や関係者による新たな意見交換の場として期待される。

○櫻井委員

ワークショップについて大変期待している。現段階で住民の方々の期待や熱量といったものはどのような感じか。

○事務局（多賀城市文化財課）

ワークショップは勉強会として開催してからまだ2年に満たないが、それ以前も地区の意見を受けながら数年間、年に数回開催してきた経緯がある。現在も、行政の考えと必ずしも一致するわけではないものの、地区住民からさまざまな御意見を受け取りながら、政庁復元を地域資源、さらには文化観光資源として成長させ活用していく方策を模索している。

地元の委員とも連携しつつ、地区と行政が手を取り合い、史跡の積極的な活用を図っていく考えである。

○事務局（県観光戦略課）

この件に関して、地元メンバーの一員として佐藤委員に御発言願いたい。

○佐藤委員

質問の件については、まだ始動したばかりであり、今後さらに機運を高めていく段階にある。代表として会議に参加している立場から、得られた意見を地元へ丁寧に伝え、地域と共有しながら着実に前へ進めていく考えである。

○高橋委員

本日の議題とはやや異なるが、シビックプライドの醸成について述べる。現在、多賀城南門前でスケートボードを中心としたアーバンスポーツ施設「TAGAJO CENTRAL PARK」を3月に開業予定であり、それが地域にもたらす価値を検討する中で、多賀城や宮城県内自治体の各種指標を調査した。

その結果、デジタル庁の Well-Being 指標において、多賀城市は他自治体と比べ自己肯定感が低い傾向にあった。一方で富谷市などは比較的高い数値を示している。こうした状況を踏まえ、市単位あるいは県単位でシビックプライドをいかに育てるかが重要な課題と認識している。

シビックプライドは、子どもたち自身が「多賀城は良い」と感じる内発的意識と、周囲から「多賀城は誇れるまちだ」と評価される外発的評価の双方から生まれるものとする。そのため、地域内部の取り組みと同時に、県全体の中で多賀城をどのように位置づけ、特に教育の中でどのような重みを持たせているのかが気になるところである。

例えば国宝の多賀城碑を有する歴史的価値が、県内でどの程度共有されているのか。自分たちのまちを知ることに加え、他の県民にも同様の認識を広げる必要があるのではないかと。広域的な視点での多賀城の位置づけも同時に検討すべきではないかという問題意識を持っている。

○事務局（県文化財課）

県として特定分野に特化した取り組みを行っているわけではないが、県民向けの機会を設けながら、多賀城の価値や意義を県内全体に広く発信していく考えである。

○事務局（多賀城市市民文化創造課）

Well-Being 指標における多賀城の自己肯定度の低さは把握している。ただし、限られた資料に基づく分析でもあり、その点は踏まえる必要がある。市としては総合計画の中でシビックプライドを数値として把握し、その向上を目指す取り組みを進めている。

例えば多賀城創建1300年の機会を通じ、市内の子どもたちの多くが節目の年を認識するようになり、特産品として古代米を挙げる子どもも増えている。こうした積み重ねを行ってきた。

また、歴史学習の機会を設けるだけでなく、文化芸術など多様な切り口から多賀城に触れる取り組みも行い、自分のまちへの誇りを育む機会を創出している。今後も継続していく考えである。

○宮城県経済商工観光部長 中谷 明博

ワークショップは地元住民だけでなく、県民も巻き込み、多賀城の復元を「自分たちのもの」として共に作る機会を設けることを意図している。来年度は各 2 回程度の開催を予定しており、多賀城の価値や歴史を広く県民に伝える機会を増やし、シビックプライドの醸成につなげることを目的としている。

2. 議事（4）第 1 回及び第 2 回検討会の報告

○事務局（県観光戦略課）

(4) 第 1 回・第 2 回検討会の報告について説明する。資料 22 ページ以降には、これまでの会議で事務局が示したポイントと委員からの主な御意見を整理してある。各ページの詳細説明は省略するが、今回の会議でも引き続き検討すべき事項を事務局で抽出しており、追加の御意見を求めたい。

資料 26 ページ下段には検討いただきたい事項として、「仙台・塩竈・松島など近隣エリアとの広域連携における多賀城の役割」、「どのような観光モデルを形成できるか」、「他のエリアにはない多賀城固有の魅力や価値をどのように醸成するか」、「民間や地域が潤うマネタイズの仕組みをどのように構築するのか」を挙げている。

これらは既に委員から御意見を頂いているが、先月の住民勉強会では、地元から「具体的な意見を出すために他地域の事例を学ぶ機会が欲しい」との声もあった。事務局としても、他地域の優良事例を紹介するなど、具体的な取り組みの検討に役立つヒントやアイデアをさらに集めたいと考えている。

○他力野委員

広域連携の観点から、多賀城の観光モデルを整理する必要がある。仙台・塩竈・松島それぞれに訪問者の期待や役割が異なるため、多賀城に来る理由を明確化し、既存の拠点との違いを示すことが重要となる。

国内旅行者は長期滞在が少ないため、仙台を訪れる人が「もう 1 泊どこにするか」という選択肢として多賀城を加える仕組みが必要となる。太宰府や愛媛県大洲の事例のように、主要都市を拠点にして、近隣の歴史・文化資源を「プラス 1」として訪れる構造が参考になる。単に観光名所を 1 つ増やすだけでは滞在時間が短く、地域経済への効果も限定的になる。

多賀城には深い理解や長時間滞在によって得られる体験や知識があるため、それを目的化できるコンテンツの構築が重要である。仙台を主要拠点とした場合の差別化を明確にし、多賀城を訪れる意義を伝えることで、宿泊・長期滞在につなげる観光モデルが成立する。

福岡と太宰府の関係のように、主要都市には歴史的建造物が少ない一方、少し足を伸ばせば本物の史跡がある状況と同様に、仙台周辺でも多賀城が歴史的価値を担うことで、訪問者を引き付ける可能性が高い。

○事務局（県観光戦略課）

更に確認させていただきたいが、大宰府でもう1泊、それから大宰府でお金を落としてもらう仕組みについて、何か仕掛けられている事例などがあれば、ご教授願いたい。

○他力野委員

人々が宿泊するのは、夜や早朝、食といった地域の価値が組み合わさったときである。太宰府の事例では、九州国立博物館のナイトツアーや太宰府天満宮の参拝の特別時間帯など、通常では体験できない特別な体験が提供され、本質的な価値が生まれている。

食に関しても、地元の歴史や文化を反映させた高品質な飲食体験を提供することで、観光客と地元客のバランスを取りつつ、訪問・宿泊の動機を作っている。地方では宿や食のクオリティが都心に比べ低い傾向があるため、東京圏からの旅行者が満足できるサービス・食材・体験を組み合わせることが重要である。

高品質な宿泊施設と地域ならではの体験をセットにすることで、訪問者は滞在を目的化し、地域に泊まり、消費する循環が生まれる。この基本的な原則を忠実に実行すれば、多賀城も観光地として選ばれる可能性が高い。

○松澤委員

太宰府の事例では、地元住民が外部からの訪問者を自ら案内するなど、シビックプライドが観光体験に直結している。観光資源は大きく三つ、行きたいと思わせる核となる施設・場所のような「誘引コンテンツ」、核となる施設のついでに寄る施設でお金が落ちる場所である「周遊コンテンツ」、移動やルート整備の「インフラコンテンツ」に分けられる。これらを整理・組み合わせることで、地域全体の観光価値が向上する。

太宰府政庁跡のように、人が少なく滞在時間が短い場所はプロモーション次第で魅力化できる。地元事業者や施設との連携、松島や塩竈などの周辺地域との特色ある組み合わせにより、仙台周辺の観光ラインを強化できる。この考え方を多賀城や周辺エリアに応用することで、訪問者の滞在・消費を促す観光モデルが形成できる。

○高橋委員

観光エリア連携の議論では、収益モデルやコスト負担を誰が担うかが焦点になるが、現時点では明確な主導事業者がない。松島の宿泊施設や民間事業者の間では既に個別連携が進んでおり、誘客タイミングやコスト負担の調整が可能なモデルが生まれつつある。多賀城の収益化や観光モデル形成も、まずはこうした民間の自立的取り組みを軸に進め、成功事例を作ることで再現性のあるモデルとして示すことが可能である。

同時に、仙台・多賀城・塩竈・松島の歴史的な時間軸が異なるため、観光ルートやコンテンツの統一性が欠ける点が課題。多賀城の魅力を生かすため、時間軸や歴史的な文脈を整理した上で、民間事業者と連携してエリア全体の観光コンセプトを再構築する必要がある。徐々に民間も動き始めており、来年度には具体的なモデル化が期待される段階である。

○藤澤委員

歴史的な年代の違いをどうつなぐかは重要で、多賀城碑と松尾芭蕉の江戸時代の訪問や「奥の細道」との関わりなど、実際のつながりを生かしてストーリー化することが大切。まだ十分知られていないこうした背景や誘引の理由を分かりやすく整理・提供することで、地域の魅力や歴史理解を深めることができる。

○佐藤委員

現状、多賀城に来訪者を引き付ける仕掛けはまだ少なく、「何を目的に来るのか」という明確さも十分ではない。すぐに施設やコンテンツを作るのは難しいが、将来的に価値を生むのは、若い世代や新しい取り組みを楽しむ人たちを増やし、地元からプレイヤーを育てることである。

○事務局（県観光戦略課）

資料 30 ページでは「浮島収蔵庫の活用方法」と「東北歴史博物館との具体的連携策」を議題としており、これまでに寄せられた御意見も踏まえつつ、事務局として幅広くアイデアをいただきたい。事業費や運営主体にこだわらず、訪問者の満足度向上につながる利活用策や連携策の可能性を他地域の事例も参考に御意見をいただきたい。

○他力野委員

収蔵庫は駅・博物館・史跡に近く、立地は非常に良いが、史跡エリアは広く、駐車場やトイレ、飲食など人が集まれる恒常的な拠点が不足している。現状の博物館や入口の案内施設は小規模で、十分な受け入れ機能がない。将来的には、トイレや展望、飲食、宿泊などを含めた常設の利用拠点を整備し、博物館から史跡へとつなぐ「黄金ルート」を構築することで、多賀城跡の深さや魅力を体感できる環境を作る必要がある。史跡は保護が前提で触れないため、限られたエリアでの体験を充実させつつ、広域的に回遊できる仕掛けも重要となる。

○藤澤委員

浮島収蔵庫は機能拡張の候補地として適しているが、全面的な再開発や移転はコストが大きい。収蔵施設を維持しつつ「見せる収蔵庫」として展示する方法や、ガイドツアーで内部に入れるなどの工夫で、発掘品や資料の価値を活用することも可能。収蔵庫の場所は必須ではないが、現状を活かした活用策を検討できる。また、東北歴史博物館から多賀城跡までの距離や道路事情を考慮し、歩行だけでなく電動車やアシスト自転車など多様なモビリティ手段を整備することで、安全かつ快適に周遊できる体制を作ることが重要となる。

○櫻井委員

収蔵庫は個人的には取り壊し、古代の伸びやかで何もない空間を再現するのが望ましいと考える。一方で、駅から多賀城跡への導線上にあり、休憩や軽食ができる商業的な便益もある程度必要と考えられる。大型施設ではなく、軽量で取り壊しや移設が容易な屋台村のようなテンポラリー施設を配置し、南門や正殿を眺められる場を作る方法もある。収蔵品の扱いなど課題はあるが、元の空間の伸びやかさを保持しつつ、必要な施設をデザイン次第で追加できる可能性がある。

○佐藤委員

浮島収蔵庫は国府多賀城駅からの動線上で立地が良く、隣のあやめまつりとも連携可能。ただ、展示は充実しているものの建物自体の制約もあり、観光名所として活用するには難しい面もある。現状のままでは立地の利点を十分に生かせていないとも言える。

○櫻井委員

最近広島で見た平和記念資料館付近の木造店舗や、松本・盛岡の川沿いの簡易施設は、恒久的建物ではないが雰囲気良くカフェなどが入っており、住民も観光客も利用している。こうした簡易でデザイン性のある施設は取り壊しも容易で、地域での活用例として参考になる。

○松澤委員

現在、新築で建物を建てても建設費が高く、宿泊費1人1泊10万円以上の高級宿でようやく回収できる状況で、それ以外では民間では採算が合わない。代替策として全国でトレーラーハウスやユニット型施設を並べ、カフェや雑貨店などを集めたビレッジ型の活用が進んでいる。多賀城の収蔵庫跡も、現状では純民間で新築や商業施設を作るのは難しく、行政がサテライト会場的に支える形で、展示や「見せる収蔵庫」として活用する方が現実的。民間で回収可能な計画にするには、地元直売所など地域ニーズに応じた方法も検討できるが、基本的には現状のまま見せる仕組みを整える方が合理的と考えられる。

○他力野委員

横浜メルパルク跡地の事例では、次の本格施策までの間、人が集まる拠点を期間限定で設置する形で、トレーラーカフェなどローコストかつデザイン性のある施設を導入している。歴史的価値のあるエリアは傷つけず、史跡ではない場所に仮設コンテナを置くなど地面を痛めない工夫をしており、水回りなどの機能も兼ねた拠点として活用。コストを抑えつつコンテンツを生み出し、収支を合わせる方法は複数考えられる。この手法は、多賀城でも史跡を保護しながら人を集める拠点作りに応用可能と考えられる。

○事務局（県観光戦略課）

トレーラーカフェの事例について、事業は大体どれくらいになるか。

○他力野委員

「ビジターズドック」と名付けたトレーラーカフェはおそらく約 1000 万円だったと思うが、後ほど確認させていただきたい。城で実施したコンテナ 3 連結型の施設は約 3000 万円かかっている。

○高橋委員

多賀城の 1300 年の歴史は、単なる観光以上の社会的価値を持つ可能性がある。近隣の教育機関や文化的環境と組み合わせることで、歴史的な学びの場やリカレント教育、特異性のある学校・キャンパスの設置など、新しい形の学習・文化拠点として活用できる。観光収益だけでなく、教育・文化の軸で価値を生み出すことで、多賀城の歴史的強みを最大化し、地域や広域の学都仙台との連携にもつなげられる。

○藤澤委員

文化的な活用も有力な方向性の一つであり、歴史的資源のある場所に文化や歴史に関連する施設を設置することは、価値を引き出す有効な手段として検討に値する。

○事務局（県観光戦略課）

資料 34 ページでは整備に関する 3 点を示している。①復元整備の順番は既に説明済みである。②復元建物の利活用については、他地域の事例や新たなアイデアを御意見としていただきたい。③工期や費用を抑える工夫も重要で、テクノロジー活用などの事例に加え、他の取り組みについても御意見をいただきたい。

○他力野委員

このプロジェクトで最も難しいのは、完全復元までの期間が非常に長く、その間どう見せて人を引き付けるかという点である。愛媛県の大洲城の事例では、復元直後は入場者が一時的に増えたものの、長期的には減少したが、市民や町全体の取り組みで歴史体験や城泊などの誘引・周遊・インフラコンテンツを整備した結果、徐々に来訪者が増加した。重要なのは、本物の史実に基づいた建物や体験を提供し、没入感と学びを伴わせること。完全復元までの過渡期においては、工事の中でどう没入感を作り出すかが課題で、陣幕や演出などで雰囲気を出す方法もあるが、時代背景に合った適切な見せ方を考える必要がある。最終的に重要なのは、本物の場所での体験をいかに提供するかである。

○櫻井委員

展示や運営方法の順序は提示通りで問題ないが、具体的な内容は慎重に考える必要がある。首里城のお土産売り場のように日常的に商業施設を置くと、荘厳さや価値が損なわれる可能性がある。一方、イベント的・非日常的な活用は適している。工期や費用を抑える工夫は考えられるが、文化財の価値を守るためには手を抜かず、伝統技術や本物の再現にお金をかけることが重要である。

○藤澤委員

復元の順番は正殿からでも問題なく、将来の活用や政庁の荘厳さを踏まえて機能を慎重に考える必要がある。正殿両側の建物は、平城宮跡のように吹き放ちであった可能性もあるため、本物に忠実に復元すると多用途には使いづらいことを想定すべきである。物販などの異なる機能を持たせる場合は、建物内部か別の場所かを政庁全体の体験や使い方に照らして判断すべきである。工期や費用は節約できる部分は工夫しつつも、伝統的技術や本物の価値を重視し、それを活かして寄付などの資金確保も検討すべきである。

○高橋委員

富山県南砺市井波の例では、瑞泉寺の焼失後、木工の名匠の技術を軸に 1 軒のコンセプト宿を起点に街の再生が始まり、今では約 80 軒のリノベーションや体験型街づくりに広がっている。ここから学べるのは、本物の技術やノウハウを包括的に残し、空き家問題など将来の課題に応用することが可能という点である。一方、多賀城南門前のセントラルパークでは、スタートアップ「VUILD」がデジタルファブリケーションでカフェを建設しており、大工の技術が失われる中でも工法を保存しつつ、街づくりや工数削減に活用できる可能性がある。伝統を守るだけでなく、新しい技術や多角的アプローチを組み合わせることで、持続可能な街づくりや課題解決に繋がられる。

○佐藤委員

30 ページ②の歴博と多賀城跡の連携では、徒歩だけだと移動に課題があるため、二次交通の仕組みが必要になる。岩手県遠野市の事例では、JR 駅からの移動に公用車を EV カーシェアとして活用し、土日は一般利用可能にする方式が実証されている。こうした EV カーシェアや電動アシスト自転車の導入も、多賀城エリアでの移動手段として検討可能である。

○松澤委員

仙台市ではタイムズと連携し、役所など平日利用者が使う車を土日に観光用カーシェアとして解放する仕組みを実施している。これにより、平日稼働率が低く採算が合わない問題を解消し、スマホで予約・利用履歴も把握可能になる。多賀城利用を考える場合、設置場所を仙台か多賀城かで利用頻度が変わるが、鉄道との組み合わせも含めると移動・観光コンテンツとの相性が良い。

○佐藤委員

多賀城にはカーシェアやレンタカーがほとんどなく、観光客にとって移動手段が限られている。もしこれらを整備し、総社宮などと連携して情報発信や参拝を組み合わせられれば、周遊促進につながる可能性がある。

3. その他

○事務局（県観光戦略課）

今後の流れとして、事務局は第1回から第3回までの議論を取りまとめ、報告書案を作成する。その案を委員に確認いただき、検討会としての報告書を完成させ、できれば2月中に仕上げる予定である。その後、宮城県で教育委員会や議会に報告し、多賀城政庁復元整備方針を策定する。場合によっては来年度にずれ込む可能性がある。その後、県の大規模事業評価で事業の必要性・妥当性を確認し、承認されれば令和9年度当初予算に基本計画策定費が計上される。並行して、多賀城市の保存活用計画への反映や文化庁との協議、地域住民との意見交換も進める。

検討会は今回で最終だが、来年度以降も年1回程度、委員に進捗報告と意見聴取の場を設けたいと考えている。会議の最後に、委員一人ひとりからこれまでの会議を振り返った感想や復元に向けた応援メッセージがあればいただきたい。

○櫻井委員

多賀城跡調査研究委員会から参加した立場として、観光分野の専門家の意見を聞いたことは非常に参考になった。長期的なプロジェクトで、対象が1300年前のものという時間軸の異なる内容であるため、単年度での成果に固執せず、丁寧に議論を重ね、多様な意見を取り入れながら慎重に進めることが重要だと考えている。

○佐藤委員

先ほど御案内いただいた「多賀城跡周辺まちづくり協議会」を今後立ち上げ、地元の人々と情報共有しつつ、ワークショップ参加者にも紹介する場とする予定である。今後も御協力をお願いしたい。

○高橋委員

第1回目は答えのない状況で大変だったが、一定の方針や方向性は見えてきた。文化財整備は単年度KPIではなく、複数年度で議論しながら進めるべきで、観光や地域課題など社会的視点も含めて検討することが重要。県と連携しつつ、より良い方法を模索して進めていきたい。

○他力野委員

この復元事業は、歴史を物語としてではなく、目に見える形で再現する非常に意義ある活動で、日本でも例の少ない大規模事業となる。文化の有形・無形をセットで伝えることで臨場感や継承が生まれ、東北の歴史を体感できる場として、多賀城市や宮城県だけでなく地域全体の転換点となる可能性がある。短期的な収支ではなく、社会的意義が認識されれば寄付や国の支援も得られ、計画が実現することの価値は非常に大きい。

○藤澤委員

私は考古学の専門として、この整備委員会などに参加してきたが、今回は活用を重視した議論や多様な事例から多く学ぶことができた。多賀城政庁の復元は、特別史跡の中心部にあたる1300年前の建物を再現する極めて大規模で困難な事業であり、成功すれば地元や宮城県の誇りとなることを期待している。今後の困難もあるが、後世に恥じない仕事を目指して取り組むことが重要である。

○松澤委員

私は歴史の専門家ではないが、今回の参加は大変貴重な機会となった。うるま市の事例では、銀行時代に勝連城周辺の公園整備の再公募相談をきっかけに関わり、現代版組踊の感動から最強メンバーを連れて事業に関与した。その取り組みは市民の誇りとなり、子どもたちの教育や移住意欲にも影響している。実際に何度も訪れ、地域の魅力を体感する中で、1300年前の歴史事業も今からでも実現可能だと感じた。一方で、行政や委員だけではなく、地元の主体的な「エンジン」となる人材の存在が事業成功の鍵であると考えている。

4. 閉会

○事務局（県観光戦略課）

委員の皆様には、9月5日の現地視察以降、約半年間にわたり専門的知見を活かした御助言を多くいただいた。事務局として至らぬ点もあったが、最後まで支えていただき心より感謝申し上げます。今後はその御意見を実現に向け全力で取り組んでまいります。以上をもって第3回検討会を終了する。